

論 文

モンゴル語における -jee と -aad bai-n の使用条件について

——日本語の -タ・-テイルとの対照——

Conditions for the Use of -jee and -aad bai-n in Mongolian: A Comparison with Japanese -ta and -teiru

伶 艶

(岡山大学大学院)

LING Yan

(Graduate School, Okayama University)

目 次

1. はじめに
 - 1.1. 研究の背景
 - 1.2. 研究の対象・目的
2. -jee と -aad bai-n の使用条件の検証
 - 2.1. 「変化経緯の把握」の観点から
 - 2.2. 「情報の言語化」の観点から
3. -jee・-aad bai-n と -タ・-テイルの対照
 - 3.1. 日本語とモンゴル語の共通点
 - 3.2. 日本語とモンゴル語の相違点
4. おわりに

1. はじめに

1.1. 研究の背景

日本語とモンゴル語¹⁾(ホルチン方言)が類似した文法構造を持つ言語であることは、よく知られている。(1)のように、過去の出来事を叙述する場合、日本語では -タ、モンゴル語では -jee が使用され、(2)のように現在の結果状態を叙述する場合、日本語では -テイル、モンゴル語では -aad bai-n が使用されている。

状況：前を歩いている人が本を落としたのを見てすぐ、落とした人に向かって

- (1) a. 本が {落ちましたよ / *落ちていますよ。}
b. nom-šin { un-jee šüü / *un-aad²⁾ bai-n šüü. }

本-2PRC 落ちる-PST よ / 落ちる-CV EX.V-PRS よ

状況：キャンパスで誰かが落とした本を発見して

(2) a. 本が { *落ちた / 落ちている。 }

b. nom { *un-jee / un-aad bai-n. }

本 落ちる-PST / 落ちる-CV EX.V-PRS

(1) (2)から、-タには -jeeが、-テイルには -aad bai-nが対応していることが分かる。ところが、(3) (4)のように、同じ目の前の現在の状況を表現しているにも関わらず、日本語とモンゴル語の表現が対応しない例が見られる。

状況：相手の服のボタンがとれているのを発見して

(3) a. ボタンが { *とれた / とれている。 } (生越1997 : 139)

b. tobš-šin { un-jee / un-aad bai-n. }

ボタン-2SG とれる-PST / とれる-CV EX.V-PRS

状況：死体を発見してすぐ

(4) a. 人が { *死んだ / 死んでいる。 } (生越1995 : 191)

b. xün { üx-jee / ? üx-eed bai-n. }

人 死ぬ-PST / 死ぬ-CV EX.V-PRS

日本語では(3a) (4a)のように、結果状態形の -テイルで表現される。それに対して、モンゴル語では(3b) (4b)のように、過去形の -jeeで表現されている。(3) (4)から、目の前に何らかの動作・変化の結果状態が存在する場合の状況において、日本語では、結果状態形 -テイルが使用されているのに対して、モンゴル語では、過去形 -jeeが使用されるという相違が見られる。本稿では、このような両言語の語用論上の共通点や相違点に着目しながら、モンゴル語における -jeeと -aad bai-nの使用条件の特徴について検討する。

1.2. 研究の対象・目的

モンゴル語の過去形及び完成相には -jeeの他に -san、-ba、-laaの3種類が存在するが、本稿では、目の前の現在の状態を表現する場合に使用される -jee³⁾及び -aad bai-n⁴⁾を研究の対象とし、その使い分けについて考察する。モンゴル語と日本語は共にSOV型言語で、文法形式の対応も比較的明確である。工藤(1995)で述べられている日本語の文法体系と、モンゴル語の文法体系(清格爾泰1991)を対照すると、テンス・アスペクト形式の文法形式も両言語は基本的に対応している。これらの対応関係を表1に示す。

表1 日本語とモンゴル語のテンス・アスペクト形式及び意味的対応関係

	日本語		モンゴル語		
	完成相	継続相	完成相	継続相	
		動作進行 結果状態		動作進行	結果状態
非過去	-ル	-テイル	-n	-j bai-n	-aad bai-n
過去	-タ	-テイタ	-jee	-j bai-jee	-aad bai-jee

両言語のどちらも、アスペクトのカテゴリにおいて、完成相と継続相を持つ。そして、その両形式はさらにテンスによって非過去形と過去形に分かれている。具体的な形式を挙げると、モンゴル語のテンスの過去形及びアスペクトの完成相 *-jee* は日本語の *-タ* に対応し、モンゴル語の継続相 *-j bai-n* と *-aad bai-n* が日本語の *-テイル* に対応していると言える。日本語の結果状態形 *-テイル* には、モンゴル語の結果状態形 *-aad bai-n* が対応する。どちらも動作の結果・変化の結果状態を表すので、ここではこれらの形式を「結果状態形」と呼ぶ。日本語とモンゴル語における継続相を具体的な例で示すと、(5) のようになる。

(5) a. 氷が溶けている。 (結果状態/進行状態)

b. *müs xail-aad bai-n.* (結果状態)

氷 溶ける-CV EX.V-PRS

「氷が溶けている(溶けた状態にある)。」

c. *müs xail-j bai-n.* (進行状態)

氷 溶ける-CV EX.V-PRS

「氷が溶けつつある。」

日本語では(5a)のように、*-テイル* は結果状態を表すが、場合によっては進行状態も表すことができる。一方、モンゴル語では、結果状態を表す場合は、(5b)のように結果状態形の *-aad bai-* が使用され、進行状態を表す場合は、(5c)のように進行形の *-j bai-*⁵⁾ が使用される。つまり、日本語では結果状態及び進行状態を *-テイル* という同一の形式で表す。これに対して、モンゴル語では結果状態を *-aad bai-* で表し、進行状態を *-j bai-* で表しており、形式が使い分けられている。

本稿では、研究背景で上述した例文(1)～(4)のように、「目の前の何らかの結果状態をどう表現するか」という場面である「ある変化の結果状態を見た時」の情報を言語化することについて考察する。そして、この場合における両言語の *-jee* と *-タ* 及び *-aad bai-n* と *-テイル* の相違点・共通点を整理することを通して、モンゴル語の *-jee* 及び *-aad bai-n* の使用条件の特徴を究明することを目指す。

2. *-jee* と *-aad bai-n* の使用条件の検証

「ある変化の結果状態を見た時」における *-jee* と *-aad bai-n* の使用条件を「変化経緯の把握」と「情報の言語化」という観点から考察する。これらが語用論的背景と文法形式の選択とは密接に関わっ

ていると考えられる。このことについて、2.1節以降で具体的例を示しながら概観していく。

2.1. 「変化経緯の把握」の観点から

生越(1997)では、「ある変化の結果状態を見た時」について、「変化経緯の把握」という観点から日本語の -タと -テイルを韓国語と対照しながら、次の(6)のように日本語の特徴を述べている。「変化経緯の把握」とは、目の前に変化の結果状態がある場合、その変化の過程を直接見聞したりするという直接知覚や変化前、変化原因を把握するというように、話者が変化の全体の経緯を把握していることを指す。-タ・-テイルが、「変化経緯の把握」によって以下のように使い分けがあると指摘している。

- (6) -タ：直接知覚したのと同程度に、変化の経緯全体を把握できた時に使用される。
-テイル：経緯全体が把握できない時に使用される。

日本語では、話者がこれまでの経験をもとにその変化の過程、全体を完全に把握できるなら、-タが使用され、把握出来ないなら -テイルが使用されるということである。本節では生越(1997)の「変化経緯の把握」という概念を援用して、日本語と対照しつつ、モンゴル語の -jee と -aad bai-n について検討する。

ある変化の結果状態を見た時、「変化経緯の把握」という観点から見れば、(7)のように、日本語とモンゴル語では、話者がその変化の過程を直接知覚し、全体の経緯を完全に把握できるなら、-タ・-jee が使用される。

状況：前を歩いている人が本を落としたのを見てすぐ、落とした人に向かって

- (7) =(1) a. 本が {落ちましたよ / *落ちていますよ。}
b. nom-šin { un-jee šüü / *un-aad bai-n šüü. }
本-2PRC 落ちる-PST よ / 落ちる-CV EX.V-PRS よ

ところが、(8)のように、話者がある変化の結果状態を見た時にその変化の経緯を把握できない場合、日本語では -テイルが使用され、-タは使用されないが、モンゴル語では、-jee と -aad bai-n のどちらも使用可能である。

状況：相手の服のボタンがとれているのを発見して

- (8) =(3) a. ボタンが { *とれた / とれている。 } (生越1997 : 139)
b. tobš-šin { un-jee. / un-aad bai-n. }
ボタン-2PRC とれる-PST / とれる-CV EX.V-PRS

このことから、日本語とモンゴル語において、テンス・アスペクト形式の使用に相違が見られることが分かる。日本語では話者が変化の経緯を把握していない場合は -テイルが使用されるが、モ

ンゴル語では話者が変化の経緯を把握していない場合は -jee が使用可能である。その他、日本語とモンゴル語のどちらも、変化の過程を全体的に再現できる必要はなく、話者が主体の変化前の状態をはっきり記憶し、話者が主体の変化前と変化後の状態の違いに気が付いた場合は、-タ・-jee が使用される。

状況：凍るかどうかがわからない自分で作った氷菓子を冷凍庫に入れて、次の日に冷凍庫を開けた時に凍っているのを見て

(9) a. 凍った／?凍っている。

b. xüld-jee / ? xüld-eed bai-n.

凍る-PST / 凍る-CV EX.V-PRS

状況：よく止まる時計が止まるのをみて

(10) a. あっ！ {止まった／止まっている。} (生越1995 : 200)

b. a ! { jogs-jee / jogs-ood bai-n. }

あっ 止まる-PST / 止まる-CV EX.V-PRS

(9)(10)の場合、話者は「氷菓子が凍っていない」「時計が止まっていない」という主体変化以前の状態を覚えており、かつ変化後の状態に気付いている。つまり、話者が主体の変化前の状態をはっきり記憶している場合である。このように、両言語は、話者が主体の変化前と変化後の状態の違いを知り、経緯を把握できた場合-タ・-jee が使用される。次に、変化前の状態を話者が見ていない例を示す。

状況：自分でも菊を育てている人が菊の花の品評会に行って、出品している花を見ながら

(11) a. きれいに {咲いたな／咲いている。} (生越1997 : 143)

b. saixan { delger-jee / delger-eed bai-n. }

きれい 咲く-PST / 咲く-CV EX.V-PRS

(11)において、話者は変化の瞬間だけではなく、変化前の状況も直接見ていない。しかし、日本語では、-タが使用されるのは話者自身も菊を育てているため、類似した変化を何度か見ている場合である。もし、話者が菊の花をあまり見たことがない人だと、-タが使いにくくなる(生越1997)。つまり、これまでの経験をもとにその変化の過程全体を完全に把握できるなら、-タが使用される。同様な状況で、モンゴル語の -jee も使用される。

日本語とモンゴル語の -タと -jee が使用される条件は、「変化経緯の把握をしている」という場合は共通しているが、「変化の経緯の把握をしていない」という場合は異なる。それは -jee が使用されるには話者が変化前の状態を知っているか否かは重要ではない。日本語では経緯が把握できたとする基準、つまり -タが使用される基準がきびしいが、モンゴル語の -jee はそうでもない。このことについて、次の例文で見ていく。

状況：喫茶店でAとBの二人が話している。話し終わってAが先に立とうとした時、テーブルの下にBの手袋が落ちているのに気が付いた。Aがまだ座っているBに対して

(12) a. 手袋が {落ちた／落ちている。} (生越1997: 144)

b. *šou tao-šin* { *un-jeec* / *un-aad bai-n.* }

手袋-2PRC 落ちる-PST / 落ちる-CV EX.V-PRS

状況：喫茶店でAとB二人が話している。話しが終わってAが先に立とうとした時、テーブルの下にAのものでもBのものでもない、誰かの手袋が落ちているのに気が付いた。Aがまだ座っているBに対して

(13) a. 手袋が {?落ちた／落ちている。} (生越1997: 144)

b. *šou tao-n* { *un-jeec* / *un-aad bai-n.* }

手袋-3PRC 落ちる-PST / 落ちる-CV EX.V-PRS

日本語に着目すると、(12a)は話者が落ちている手袋が「誰のものであるか知っている」ことから、直接知覚したのと同程度に変化の経緯全体を把握できると説明でき、-タが自然に使用できる。一方、(13a)は「誰の手袋であるか知らない」という変化の経緯が把握できない状況であるため -テイルが自然で、-タが不自然である。変化の経緯が把握できない状況の場合は基本的に目の前の状況の情報を -テイルによって表現されている。これに対して、モンゴル語では、話者が落ちている手袋が「誰のものであるか」を知っているか否かに関わらず、(12b) (13b)のどちらも変化の瞬間を言語化し、-jeecが自然に使用できる。

以上の考察をまとめると、変化が起きた時の様子を話者が見聞したという直接知覚している場合、または変化前の状況及び変化原因を直接知覚している場合、つまり話者が変化の経緯を把握している場合は -タと -jeecが使用されるところが共通している。しかし、話者が変化の経緯を把握していない場合は、日本語では -テイルが使用されるが、モンゴル語では -jeecと -aad bai-nが使用される。これらを表2のようにまとめることができる。

表2 両言語の変化経緯の把握による相違

変化経緯の把握による状況	両言語の使用される形式	例文
把握している	-タ -jeec	ボタンが落ちた。 <i>tobš-šin un-jeec.</i>
把握していない	-テイル -jeec / -aad bai-n	ボタンが落ちている。 <i>tobš-šin un-jeec.</i> <i>tobš-šin un-aad bai-n.</i>

モンゴル語では「変化の経緯を把握」していない場合 -aad bai-nの他、-jeecも使用されるのは、変化の瞬間の情報を言語化する「意外な情報の言語化」と密接に関わりがあるのではないかと思われる。次に「情報の言語化」の観点からその特徴を探る。

2.2. 「情報の言語化」の観点から

話者が変化経緯を把握していない場合の「ある変化の結果状態を見た時」の情報を言語化することについて、「一次情報」の言語化と「二次情報」の言語化とに分けて考えることができる。そして、一次情報と二次情報の観点から -jee と -aad bai-n の使用の相違を探る。

2.2.1. 一次情報及び二次情報

「一次情報」の言語化とは、話者が直接観察している発見直後である生の情報を言語化する場合を指し、「二次情報」の言語化とは、話者が観察によって得た情報を頭の中で処理したことにより、鮮度が落ちてしまう情報を言語化する場合を指す。ある情報を言語化する時、次の(14)は一次情報を言語化し、(15)は二次情報を言語化していると考えられる。

状況：死体を発見してすぐ

(14) = (4) a. 人が {?死んだ／死んでいる。} (再掲生越1995 : 191)

b. xün { üx-jee / ? üx-eed bai-n. }

人 死ぬ-PST / 死ぬ-CV EX.V-PRS

状況：ニュースで現場の記者が

(15) a. 道端で人がたくさん {?死にました／死んでいます。} (生越1997 : 148)

b. jam-iin xajuu-dolon xün { ? üx-jee / üx-eed bai-n. }

道-GEN 端-DAT 多い人 死ぬ-PAS / 死ぬ-CV EX.V-PRS

日本語において、(14a)の一次情報及び(15a)の二次情報に関わらず、どちらも -テイルで表現されている。一方、モンゴル語では(14b)の一次情報の場合は -jee で表現され、(15b)の二次情報では、-aad bai-n で表現されている。(14)の場合は、発見直後である生の一次的な情報となり、「人が死んでいない」から「人が死んだ」という変化の瞬間の情報をモンゴル語では -jee によって自然に言語化されている。これに対して、日本語では変化の瞬間の情報を -タによって言語化できず、基本的に目の前の状況の情報を -テイルで言語化されている。(15b)の場合は、ニュースの記者が、発見の直後の一次的な生の情報から、既に頭の中で処理した上での二次的な情報に換えられ、客観的に描写している。この場合は、両言語共に -aad bai-n と -テイルが使用される。次の例文も同様な解説ができる。

状況：腕時計が止まっているのに気が付いて

(16) a. あっ！ { *止まった／止まっている。} (生越1995 : 191)

b. a ! { jogs-jee / ?jogs-ood bai-n. }

あっ 止まる-PST / あっ 止まる-CV EX.V-PRS

状況：腕時計が止まっているところで、友人に時間を聞かれた場合

(17) a. 私も知らない、見て、私の腕時計が { *止まった／止まっている。}

b. bi bas medex-güi, üjee, minii gar šag { *jogs-jee / jogs-ood bai-n. }

私も 知る-NEG 見て 私の 腕時計 止まる-PST / 止まる-CV EX.V-PRS

(16)の場合は、生の一次的な情報となり、その変化の瞬間をモンゴル語では -jeeによって言語化しているが、日本語では、目の前の状況の情報を -テイルで言語化している。(17)の場合は、「腕時計が止まっている」という目の前の状況が既に以前に見たことがある状況であり、その情報を改めて客観的に描写している。これは、既に話者の世界観の一部である知識となっている二次情報であるため、両言語ともに -タと -jeeは不自然で、-aad bai-nと -テイルは自然である。日本語とモンゴル語では、目の前の状況が、以前自分で見聞きした状況であり、それを他の人に報告したり、自分で再確認したりするなどの二次情報の場合、必然的に -aad bai-nと -テイルによって表現される。これらの場合は、話者がすでにその状況を知っているわけであるため、変化後の状態が存在することを表現している存在表現と言える。ではなぜ、一次情報においては、日本語では -テイルによって表現されるが、モンゴル語では -jeeでも表現可能であろうか。これらについて、次に「意外な情報」の観点から考察する。

2.2.2. 「一次情報」の言語化

モンゴル語では、「変化経緯を把握していない」時の一次情報を表現する場合 -jeeと -aad bai-nが使用可能である。それは、話者にとっての「意外な情報」と「一般的な情報」の言語化ということと密接に関わっていると思われる。例えば、(18)では、話者にとって、常識の世界において起こるべきではないという「意外性」、もしくはあり得ないという「驚き」の変化を知ったのである。

状況：金庫の中にお金を入れて保管していたが、ある日、お金がなくなっている状況をみて

(18) a. あっ！お金がなく {?なった／なっている。}

b. a ! joos alag { bol-jee / *bol-ood bai-n. }

あっ お金 ない なる-PST / なる-CV EX.V-PRS

(18)のように「お金がなくなっている」という意外な情報を描写する場合、モンゴル語では -jeeが自然であるが、日本語では -テイルが自然である。一次情報を表している上述の(14)(15)でも、「人が死んでいる」「腕時計が止まっている」という意外な状況に直面し、意外な情報を言語化する場合と同様に -jeeが自然であるが、日本語では -テイルが自然である。また、一次情報でも、話者にとって「意外な情報」ではない状況に直面する場合がある。

状況：キャンパスで誰かが落とした本を発見して

(19) =(2) a. 本が {*落ちた／落ちている。}

b. nom { *un-jee / un-aad bai-n. }

本 落ちる-PST / 落ちる-CV EX.V-PRS

(19)では、話者にとって、常識の世界において起こるべきではない、もしくはあり得ないという変化ではなく、常識の世界において起こってもよい、もしくはありえることである。従って、「意外な情報」ではなく、常識の中ではあってもよいことから、ただの目の前の「一般情報」の存在を言

語化している場合と言える。この場合は両言語ともに -aad bai-n と -テイルが使用される⁶⁾。

また、「ある変化の結果状態を見た時」の一次情報が、ある話者にとっては常識の世界において「意外な情報」であるが、別の話者にとっては「一般的な情報」であるという状況もありうる。モンゴル語では、前者の場合は -jee が使用され、後者の場合は -aad bai-n が使用される。

状況：秋、公園に行ったところ、春咲くはずの桜の花が咲いているのを見て

(20) a. 桜が {?咲いた／咲いている。} (生越1997: 147)

b. sakura { delger-jee / delger-eed bai-n. }

桜 咲く-PST / 咲く-CV EX.V-PRS

(20b)のように、桜が秋に咲いているのを見た場合、話者は自分の常識と直面している。話者が「その変化はあり得ない」と認識し、話者にとっての「意外な情報」を言語化する場合は -jee が自然になる。一方、話者が「地球温暖化により不思議ではない、ありうる」と認識し、話者にとっての「一般情報」を言語化する場合は -aad bai-n が使用される。モンゴル語では、「意外な情報」の言語化する場合に -jee が使用されるが、日本語では、(20a)のように、「意外な情報」でも、-テイルが使用される。次の例文も同様な解説ができる。

状況：相手の服のボタンがとれているのをみて

(21) = (8) a. ボタンが {*とれた／とれている。} (再掲生越1997: 139)

b. tobš-šin { un-jee. / un-aad bai-n. }

ボタン-2PRC とれる-PST / とれる-CV EX.V-PRS

モンゴル語の(21b)では、話者にとって「ボタンがとれていない」から「ボタンがとれている」という変化の「意外な情報」を認識し、言語化する場合は -jee が使用される。一方、意外な認識がなく、ただ目の前の「ボタンがとれている」という「一般的な情報」を言語化する場合は -aad bai-n が使用される。

以上で述べたことをまとめると、日本語では、一次情報における「意外な情報」「一般情報」のどちらにも、基本的に目の前の情報を -テイルで言語化している。一方、モンゴル語では、今観察している一次情報の場合では、「意外な情報」及び「一般情報」に分けられるということになる。前者の場合は、-jee が使用され、後者の場合は -aad bai-n が使用される。この現象について、ミラティビティ (mirativity) という概念から考えてみたい。ミラティビティとは「接した情報を受け入れる準備ができていない」「接した情報がまだ自分の信念体系に組み込まれていない」といった、受け入れ準備なし、期待外の気持ちと結びつく概念とされる (DeLancey 1997: 39)。つまり、話者の驚きを言語的にコード化することであり、「ある変化の結果状態を見た時」の情報が話者にとって新しい知識を提供するか、それとも既に話者の世界観の一部となっている知識に過ぎないかを区別するものである。モンゴル語では、話者の常識の中であってはならないという「驚き」「意外性」により、新情報の「意外な情報」において、-jee が使用されることから、ミラティビティを表現できると言える。一方、常

識の中ではあってもよいことから、ただ目の前の状況を言語化する「一般情報」において、-aad bai-n が使用されることから、ミラティビティを表現できないと言える。次に日本語と対照しながら考察する。

3. -jee・-aad bai-nと -タ・-テイルの対照

「ある変化の結果状態を見た時」の情報と言語化することについて、モンゴル語の -jeeと -aad bai-n 及び、日本語の -タと -テイルのそれぞれの使用条件の共通点及び相違点をまとめ、その理由を探る。

3.1. 日本語とモンゴル語の共通点

「変化経緯を把握」している場合、「二次情報」の言語化、「一般情報」の言語化、-aad bai-n・-テイルと限界動詞の観点から、両言語の共通点についてまとめる。

1) 「変化経緯を把握」している場合

変化が起きた時の様子を話者が見聞したというように直接知覚している場合、または変化前の状況及び変化原因を直接知覚している場合、つまり話者が変化の経緯を把握している場合は -タと -jee が使用されるところは共通している。

2) 「二次情報」の言語化

「二次情報」とは、発見直後の生の情報から頭の中で処理した上で、客観的に言語化する情報である。既に話者の世界観の一部となる知識となっているため、両言語ともに -aad bai-nと -テイルが自然である。目の前の状況が、以前自分で見聞きした状況であり、それを他の人に報告したり、自分で再確認したりするなどの二次情報の場合、-aad bai-nと -テイルによって表現されるところは共通している。これらの場合は、話者がすでにその状況を知っているわけであるから、変化後の状態が存在することを表現しているだけの客観描写である存在表現と言える。

3) 「一般情報」の言語化

「一般情報」とは話者にとって、常識の世界において起こるべきではない、もしくはあり得ないという変化ではなく、常識の世界の中であり得る、もしくは、起こってもよい情報である。従って、あり得ないという「驚き」「意外性」を伴わず、ただの目の前の存在を描写している「一般情報」の言語化であるため、両言語ともに -aad bai-nと -テイルが使用される。

4) -aad bai-n・-テイルと限界動詞

「二次情報」の言語化と「一般情報」の言語化に -aad bai-nと -テイルが使用されるのは、動詞の種類から言えば、限界動詞と密接に関係すると考えられる。工藤(1995)では、日本語の限界動詞と非限界動詞について次のようにまとめている。

- | | | | |
|------|----------------|---|---------|
| (22) | a. 主体動作・客体変化動詞 | } | 内的限界動詞 |
| | b. 主体変化動詞 | | |
| | c. 主体動作動詞 | — | 非内的限界動詞 |

モンゴル語でも、松岡(2008)によれば、限界動詞とは動詞の中で **-aad bai-** が「結果性」⁷⁾を表すことができるものを指す。非限界動詞とは、動詞の中で **-aad bai-** が「結果性」を表すことができないものを指すと規定している。**-aad bai-n**と **-テイル**が限界動詞と非限界動詞と結合する場合の相違について次の例文で見ていく。

- (23) a. 犬が死んだ。 (限界動詞〈過去〉)
 b. noxoi üx-jee. (限界動詞〈過去〉)
 犬 死ぬ-PST
 「犬が死んだ。」
- (24) a. 犬が死んでいる。 (限界動詞〈結果状態〉)
 b. noxoi üx-eed bai-n. (限界動詞〈結果状態〉)
 犬 死ぬ-CV EX.V-PRS
 「犬が死んでいる。」

限界動詞と結合した過去形及び結果状態形の(23)(24)は、ともに同じ状況「犬が完全に死んでいる」ことを表し、パーフェクト形式である。日本語とモンゴル語では、過去形は、動作が完了したことに焦点を置いているのに対して、結果状態形は、動作が完了した後の結果状態に焦点を置いている。次は非限界動詞の例を見る。

- (25) a. 太郎が本を読んだ。 (非限界動詞〈過去〉)
 b. dorj nom ungs-jee. (非限界動詞〈過去〉)
 ドルジ 本 読む-PST
 「ドルジは本を読んだ。」
- (26) a. 太郎が本を読んでいる。 (非限界動詞〈継続〉)
 b. dorj nom ungs-aad bai-n. (非限界動詞〈反復〉)
 ドルジ 本 読む-CV EX.V-RES
 「ドルジは本を(何度も・いつも)読んでいる。」

非限界動詞では(25)の **-タ・-jee**は、同様な動作が完了したことを表すが、(26)の **-テイル・-aad bai-n**は限界動詞と違って、結果状態を表すことができない。日本語では、**-テイル**と共起すると限界動詞は〈結果相〉を実現するのに対して、非限界動詞は〈進行相〉のみを実現し(睦2011)、かつ「いつも」「毎日」という表現を伴うと〈反復〉の意味で用いられる。モンゴル語では、非限界動詞と結合した **-aad bai-** が「いつも、何度も」行われることを表し、「多回性」や「反復性」を表す(松岡2008)。つまり、非限界動詞と結合した場合 **-テイル**と **-aad bai-** が「結果性」いわゆる「結果状態」を表すことができない場合がある⁸⁾。(26)のように基本的に、日本語では〈継続〉を表し、モンゴル語では〈反復〉を表している。

従って、両言語は、(23)(24)のように、**-タ**と **-テイル・-jee**と **-aad bai-** が、限界動詞と結合すると

「現在の状態に対する発話」という場面を共に表現できる。両言語では限界動詞と -テイル・-aad bai- が結合すると「ある変化の結果状態」を表現できるところでは共通している。このように、-jee と -aad bai- 及び -タと -テイルが、「ある変化の結果状態を見た時」の同様な状況を表せるのは、限界動詞と結合した場合によく見られるということになる。従って、「一般情報」「二次情報」に -aad bai-n と -テイルが、限界動詞と結合した場合により多く見られる。

3.2. 日本語とモンゴル語の相違点

「変化経緯の把握」ができない場合、「意外な情報」の言語化、両言語におけるテンス・アスペクト形式の使用範囲の相違という観点から、両言語の相違点をまとめ、その理由を探る。

1) 「変化経緯の把握」ができない場合

「ある変化の結果状態を見た時」話者が時間の流れにそった全体の経緯を把握できない場合、日本語では-テイルが使用されるのに対して、モンゴル語では -jee 或いは -aad bai-n が使用される。両言語において、全体的な経緯は把握されていないとしても、-jee は使用可能であるが、-タは使用不可能というところが異なっている。

2) 「意外な情報」の言語化

モンゴル語の -jee は、話者の常識の中であってはならないという「驚き」「意外性」による「意外な情報」に使用されることから、ミラティビティを表現できる。そして、-aad bai-n は常識の中であり得る、もしくは、あってもよいという「一般情報」を言語化する場合に使用されることから、ミラティビティを表現できない。これに対して、日本語では「意外な情報」や「一般的な情報」に関わらず、基本的に目の前の状況の情報は -テイルで言語化されるというような相違が見られる。

定延(2014)によれば、日本語の -タが使用されるには、「期待」とは別の「探索意識」と「キャラクタ」によって左右されるという。また、井元(2010)でも、例えば「落ちた」の -タが使用されるのは過去スペースにイベントがアンカリングされたということを意味するという。つまり、変化の過程を目撃している「観察」や変化以前の状態を知っている「探索」によって、使用される条件になるので、実現の現在スペースには現在の過去スペースしか結び付けられない。言い換えると、発話時における「発見」や「確信」は、過去における変化経緯を把握過程による「観察」や「探索」に結び付けることによって可能になる。日本語の -タは、過去と関連がある「探索」や「観察」によって使用される場所では、モンゴル語の過去となんらかの関連(事前の潜在的な想定や既存知識)があり、かつ認識の変化は起こった場合の「発見」に使用される bai-jee (伶2014) と近いところがある。また、「落ちている」の -テイルについて、秋月(2011)によれば、「その場で気が付いた状態」を述べているという。では、井元の考察している「落ちた」と秋月の考察している「落ちている」をモンゴル語と比較対照すると次の表3のようになる。

表3 相手の服のボタンが取れているのを見て…

情報	認識過程	形式	例文
観察 探索	変化 → 完了 { 発見 確信	-タ	ボタンが落ちた。
その場で気が付いた状態	探索なし	-テイル	ボタンが落ちている。
観察・探索 その場で気が付いた状態	発見・確信 意外な情報(探索なし)	-jee	tobš-šin un-jee.
その場で気が付いた状態	一般的な情報(探索なし)	-aad bai-n	tobš-šin un-aad bai-n.

モンゴル語では「観察・探索」の他、「その場で気が付いた」情報である「意外な情報(ミラティブティ)」でも -jeeによって表現できる。一方日本語では、その場で気が付いた情報である「意外な情報」の受け入れの準備なし、期待外の気持ちと結び付く概念と -タは、そのまま無条件で同一視できるような関係にはないということになる。日本語ではその場で気が付いた「意外な情報」は -テイルで言語化されるが、モンゴル語では -jeeによって言語化される。

3) 両言語におけるテンス・アスペクト形式の使用範囲の相違

両言語におけるテンス・アスペクト形式の使用に相違が見られるのは、どのような状況を過去と扱うか、どのような状況を結果状態と扱うかという語用論的な制約の違いによるものである。両言語の相違を図式化して示すと、次の図1のようになる。

(27) ← 変化の経緯を把握できない → ← 把握できる →

-テイル		-タ	
-aad bai-n	-jee		
← 一般情報 →	← 意外な情報 →	← 変化の経緯を把握できる →	
← 変化の経緯を把握できない →			

図1 両言語のテンス・アスペクト形式の使用範囲の相違

日本語では -タが使用される基準は制限されている。-タを使うには、話者が変化の経緯を把握している場合の変化の様子を直接知覚したり、その変化と類似の体験をしたりというような情報量を持っていない場合と持っている場合のどちらも使用可能である。変化経緯を把握していない場合でも -jeeが使用されるのは「意外な情報」の言語化に関わっているためだと考えられる。そのため、日本語では、-テイルの使用範囲がモンゴル語の -aad bai-nに比べて広いが、モンゴル語では -jeeの使用範囲は日本語の -タより広い。

4. おわりに

本稿では、「ある変化の結果状態を見た時」の情報を言語化することについて、モンゴル語と日本語の語用論上の共通点や相違点に着目しながら、-jeeと -aad bai-nの使用条件の特徴について検討した。その結果をまとめると表4のようになる。

表4 -jeeと -aad bai-n及び -タと -テイルの形式の使用条件

変化の経緯	情報の分類			日本語	モンゴル語
把握できる	探索あり	① 観察	A 発見・確信	-タ (例文(7a, 12a))	-jee (例文(14b, 16b))
把握できない	探索なし	② 一次情報 (その場で気が付いた)	B1 意外な情報	-テイル (例文(14a, 15a))	-aad bai-n (例文(15b, 17b))
		③ 二次情報 (既に知っている)	C 客観的情報		

表4から分かるように、「ある変化の結果状態を見た時」の情報を変化経緯の把握できる場合と変化経緯を把握できない場合を「一次情報」「二次情報」に分類して考えることができる。それぞれの特徴は次の通りである。

- ① 両言語において、話者が直接知覚したのと同程度に、変化の経緯全体の把握している場合は -タと -jeeが使用されるところが共通している。一方、変化経緯を把握していない場合は、日本語では -テイルが使用されるが、モンゴル語では -jeeと -aad bai-nが使用される。
- ② 変化経緯の把握していない場合の -jeeと -aad bai-nの使い分けを一次情報と考えれば、その違いが明らかになる。一次情報において、話者の常識の世界であり得ない、もしくはあってはならない変化を知った「意外な情報」を言語化する場合、モンゴル語では -jeeが使用される。一方、一次情報において、常識の世界であり得る、もしくはあってもよいという「一般情報」の存在を言語化する場合は、-aad bai-nが使用される。
- ③ 話者が変化経緯の把握できない状況では「一次情報」の他に「二次情報」という場合もある。二次情報において、話者が観察によって得た情報を頭の中で処理した上で言語化するため、情報の鮮度が落ちてしまい、既に話者の世界観の一部となっている知識であるため、-aad bai-nと -テイルが使用される。

モンゴル語の -jeeと -aad bai-nの地域方言の差による、使用条件の相違を探ることは今後の課題としたい。

[略記号]

CV : 副動詞語尾 / DAT : 与位格 / EX.V : 存在動詞 / GEN : 属格 / NEG : 否定 / PRS : 現在形 / PST : 過去形 /

Q：疑問形/VN：形動詞語尾/2PRC：第2人称所有後接語/3PRC：第3人称所有後接語

[注]

- 1) 本稿における「モンゴル語」とは中国内モンゴル自治区で使用されているホルチン方言を指す。グロス及び日本語訳は筆者によるものである。
- 2) *-aad* は母音調和により、*-eed*, *-ood*, *-ööd*になる場合がある。
- 3) *-jee*について、Kürel-bayatur (2007)では、話者と聞き手のいずれの情報の縄張りにも属さない出来事を述べる際に多く使われ、当該出来事が発生・完了したことを話者と聞き手のいずれも最初から知っていたのではなく、後で知ったことを示すという。ジンガン(2010)では、*-jee*には「結果性」という意味素性があり、基準時における状況となんらかの関係がある実現済みの事柄を表現することが多いと述べている。
- 4) *-aad bai-*について、白音朝克图(2002)では、いつも行っているというアスペクト形式、查干哈达(1995)では〈持続体〉、松岡(2008)では、〈静的継続相〉と名付けをしている。
- 5) 松岡(2008)によれば、*-j bai-* が動作終了後の結果状態を動きのあるものとして捉えられる限界動詞と結合した場合は「結果性」を表す場合があるという。
- 6) モンゴル語では、*-j bai-* も「二次的な情報」の客観的描写に使用することができる場合がある。
- 7) 本稿で扱う「結果状態」を松岡(2008)では「結果性」という表現を用いている。
- 8) 日本語とモンゴル語の非限界動詞であっても、動詞以外の成分によって、任意に終了限界を定めることができる。

[参考文献]

- 秋月康夫(2011)「ている」と「ていた」の叙述性について『成蹊人文研究』成蹊大学大学院文学研究科編 pp.1-37
- 井元秀剛(2010)『メンタルスペース理論による日英時制研究』ひつじ書房
- 生越直樹(1995)「朝鮮語と日本語のシタ形シテイル形」『国立国語研究所研究報告集』pp.185-206
- 生越直樹(1997)「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について——結果状態形との関係を中心に——」『日本語と外国語との対照研究 IV 日本語と朝鮮語下巻』国立国語研究所 pp.139-152
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 定延利之編(2014)「「発見」と「ミラティブ」の間」『日本語学と通言語的研究との対話——テンス・アスペクト・ムードを通して——』くろしお出版 pp.3-52
- 查干哈达(1995)『蒙古语科尔沁土语研究』社会科学文献出版社
- ジンガン(2010)「モンゴル語のモダリティ——コーパスに基づく記述研究」東京外国語大学 博士論文
- 睦宗均(2011)「アスペクト的意味の適切な扱いに向けて——限界動詞を中心に——」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編』2(1), pp.77-95
- 松岡雄太(2008)「モンゴル語のアスペクトに関する研究——満州語・朝鮮語との対照——」九州大学 博士論文
- 伶艶(2014)「存在・コピュラ動詞 *bayi-* のテンス・ムードについて——日本語のムードの「タ」との対照を通して——」『北方言語研究』5, pp.171-190
- DeLançey, Scott (1997) Mirativity : The grammatical marking of unexpectedness information. *Typology* 1, pp.33-52
- Kürel-bayatur (2007) 'Čaqar aman ayalyun-u önggeregseñ čay-un dayaburi <-laa, -ba, -jai, -čai > -yin qoyurunduki nigen ilyağa-yin tuqai' *Temürbayana urtu-yin üjügüre gün-ü iruğara. Ündüsüten-ü keblel-ün qoriya*. pp.425-435
- 清格爾泰(1991)『蒙古语语法』内蒙古人民出版社
- 白音朝克图(2002)『科尔沁土语研究』内蒙古大学出版

